

■ 発行／神戸市灘区六甲台町1
りくそうかい
 神戸大学農学部内 六篠会
 (神戸大学農学部同窓会)
 ■ 連絡用 FAX : 078-881-2752
 ■ E-mail : ans-rikusou@edu.kobe-u.ac.jp

六篠会報



- 六篠会長の挨拶 2
- 学部長の挨拶 3
- 同窓生は今… (1) 齊藤 昭 4
 (2) 山口 吉則 5
 (3) 藤田 究 6
- 代議員総会報告 代表理事 中村 直彦 7
- 支部便り (1) KOBE 六篠会 8
 (2) 県六篠会 8
 (3) 関東支部 (神戸大学木曜会) 9
 (4) 東海支部 (役員紹介) 9
 (5) 延喜会 10
 (6) 学友会だより 10
 (7) KUCだより 11
- 最新情報 11

- 六篠会からのお知らせ 12
- 第2回ホームカミングディの開催 13
- 研究室紹介 (1) 農環境生物学講座 14
 (2) 地域環境工学講座 15
 (3) 応用動物学講座 16
 (4) 応用生命化学講座 17
 (5) 応用植物学講座 18
- 同窓会報告 (1) 庶務報告 19
 (2) 慶弔関係 19
 (3) 退官、着任の教官紹介 19
- 18年度決算報告 20
- 19年度予算報告 20
- 同窓会事務局の案内 20
- 編集後記 20

会長挨拶

六篠会会長 北浦 義久



六篠会員の皆さん、お元気で国内はもとより、海外においても、各分野で存分にご活躍のことと、心からお慶び申し上げます。

神戸大学農学部も昭和24年、篠山の地で呱呱の声を上げてから58年、今、神戸六甲の地で、着実な歩みを続けています。組織も時代の要請にこたえて、順次改組され、現在は6学科、12講座、42研究分野に整理され、教育に又、研究に力が注がれていますが、来年2008年から、さらに3学科、6コース、45研究分野に改組される予定になっています。こうした背景のもと、2006年度から始まった学舎改修工事も、今年秋に完成し、共用が開始されました。そして、11月9日、学舎改修記念行事が盛大に催され、六篠会から私を始め役員の方々も出席し、共に学舎の改修を祝い、農学部の一層の発展を祈念しました。

この新しい学舎で、より充実した教育と研究の成果が発揮されるよう、期待して止まないところです。学舎改修に伴って、設備の充実を図り、また、学舎周辺を整備する為に要する経費について、農学部の方から支援の要請がありましたので、役員会に諮り、支援することとし、規定経費の縮減をはかり、捻出のうえ、対応することとしましたので、ご報告します。

このように、教育環境も整って参りましたが、昨今の厳しい財政事情の下、大学の運営も厳しく、教育や研究の充実を図り、世界に羽ばたく大学として、発展させる為には、自主財源の確保が喫緊の課題となっています。

そこで、大学では、「神戸大学ビジョン2015」を策定し、その実現を図るため、「神戸大学基金」を造成することとし、

2006年12月に方針を決定、会員の皆さんには、すでに協力要請が出されているところです。

ご寄付をすまされた方もいらっしゃると思いますが、まだの方は母校のために是非ご協力賜りますようお願いいたします。

六篠会では、卒業生の皆さんとの交流を深め、連携を強化するため、会報を発行するとともに、地域や職域での支部活動の支援を続けて参りました。

今年も8月24日には東京KUCで関東支部の総会、10月14日には名古屋で東海支部の総会が開催され、また職域では11月3日に兵庫県六篠会、11月16日には神戸KOBEL六篠会が開催され、私も出席させていただき、楽しい歓談の一時を持つことができました。今後、他の地域や職域においても、支部が結成され、活発な活動が展開されることを願っています。

また、9月29日には、第2回神戸大学ホームカミングデイが開催され、午前の記念式典に引き続き、午後から、農学部主催の行事が行われ、学部の近況報告や、ほぼ完成した学舎・研究室の見学の後、懇親会が持たれました。

この行事を通じて、同窓会員相互並びに、先生方との交流を深めるとともに、大学の現状を理解し、認識を深めることが出来た事は大きな収穫でした。

この他、KUC活動の一環として、7月に加西の「食資源教育研究センター」を視察し、実践を通じた研究活動に、他学部同窓生の皆さんから、非常に高い評価を頂いたことをご報告しておきます。

最後になりましたが、会員の皆さんの益々のご健勝でのご活躍をお祈りし、ご挨拶とします。

大学院農学研究科長・農学部長 中村 千春



日一日と秋の色が深まり、農に携わる一人として収穫の季節を迎えた喜びを感じます。

今年は、日頃から農学部にご支援を賜っている六篠会会員の皆様に、何をおいても学舎改修事業完成のご報告を申し上げます。念願の農学研究科・農学部の学舎改修PFI事業が、10月末をもって完了し、11月9日には、C101で学舎改修記念式典がもたれます。

昭和41年の国立移管で、丹波篠山にあった兵庫県立農科大学は神戸大学農学部生まれ変わり、翌42年には農学部学舎が六甲台に築かれました。しかしながら、定礎以来40年の歳月を経て、農学部学舎は、耐震性などの安全面や教育・研究・事務管理の機能性など多くの課題を抱えておりました。さらに、本年4月には、大学院自然科学研究科の改組がなり、新たに大学院農学研究科の設立をみました。来年4月には学部の改組が予定されており、農学研究科・農学部は学部・大学院博士課程前期後期課程を含めて見通しの良い教育・研究環境が整った次第です。

この度の学舎改修PFI事業は、まさに時期を得た事業であり、これにより教育研究の高度化・多様化に対応し、省エネルギーで人に優しい学舎に改修再生することができました。本事業の完成は多くの方々のご支援の賜であり、学生諸君をはじめ教職員一同、大いに喜び深く感謝致しております。特に、六篠会からは北浦会長の暖かいご理解により、多大な資金援助を賜りました。この場をお借りして、六篠会会員の皆様方にご報告し、深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

私達の社会は今、重大な岐路に立っています。私達が

既に直面している食料・エネルギー不足と、日々進みつつある環境破壊への有効な解決策を見いだし得なければ、私達が生きるこの希有な惑星がもつ美しい環境と私達の安全で健康な日常生活が危機に瀕します。食料の安定供給、環境保全と新規バイオ産業の創成および食の安全確立を目指した農の再生が必要です。この目標に向けた科学技術と倫理規範が求められています。

農学研究科・農学部は、「食料・環境・健康生命」を旗印に、「持続可能な共生社会」を実現する一翼を担って、今後ますます、地域、我が国と国際社会にその存在意義を発信し、明日を切り開く力のある有為な人材の育成を通じて人類社会に貢献して参りたいと思います。

最後になりましたが、六篠会の益々の発展と六篠会会員の皆様のご健勝と安寧を心より祈念申し上げます。

同窓生は今…

農林水産省 近畿農政局局長

齊藤 昭

(修 5回)



六篠会会報に現在の仕事の話など執筆するよにとの依頼を受けたところですが、現在の仕事はその性格上、紙上に書くにはあまり適当でないので、卒業後間もない若い皆様に、卒業後、ずいぶんと年を経た私が感銘を受けた「言葉」につきコメントしてみたいと思います。

近年、行政も政策立案とその実行、その結果に対する評価といういわゆる「政策サイクルの確立」など、新しいシステム導入が進み始めています。どこの職場でもそうでしょうが、新しい部署に交代する場合、新しいしい部署で、漠然とした不安を抱えつつも、一方で自分の存在領域を確保すべく、なにか新しい取り組みを急ごうとする気持ちにせき立てられるものです。そのときは、月並みですが、大詩人に登場して貰います。「あせることは何の役にも立たない。後悔はなおさら役に立たない。前者は過ちを増し、後者は新しい後悔を作る。」(Goethe)

しかし、最近では、こうした心配さえ必要ない、何かをしなくてはとさえ思わない人も目につくところ。こうした人には、やはり我が国の戦後の夢をリードした苦勞の仕事人、本田宗一の「チャレンジして失敗することをおそれるより、何もしないことを恐れる。」の一言が必要か。チャレンジをさけリスクを回避すれば、悩みなき安逸な世界が待っていると考えるのは、まだまだ。不思議なことに益々悩みが深まります。このことはGoethe自身も「精神の悩みを癒すには知力では役に立たない。理性もあまり効果がない。断固たる「実行」のみが一切を為す。」としているところ。さすがに、夢を追って、ローマへの道をひた走った人の言葉です。

色々な仕事をしていくと、ある場面では多くの人と意見が異なり、もしかして自分の選択が間違っているのではと心細くなることもあります。そんなときは「自分の目標を達成している人、今の自分に満足している人に滅多に出会わない。なのに人生を左右する問題解決を多数の意見に委ねられるのか」(Kingsley)のとする意見にも耳を傾けるのもいいかもしれません。ただし、長い経緯を持った仕事の場合、多くは先輩諸氏の意見が正しい場合が多いのも事実。この言葉が有効なのは、もっと大きな人生の選択の時かもしれません。いずれにせよ、一度選択したら、周りからなんと言われようと、医療に新しい分野を確立したこの人少数者による静かな着手、地道な努力、黙々と向上しようとする努力、これこそがひとつの事業をしっかりと根を下ろして成長していくための地盤なのです。(Nightingale)の精神でいくべき。そして、最後は、「最善を尽くそう。そのあとは古傘をかざして、非難の雨が首筋から背中に流れ落ちるのをふせげばよい。」(Carnegie)で締めくくります。

神戸大学在学中は神戸を始め、京都、大阪、奈良と多く

のところに行き、色々な人や風景に出会いました。長い歳月を経て、今回、京都に来ましたので、時間を見つけて、当時の場所に行ってみ

ています。神戸、あのすばらしく活気のあった街、震災後復興はしましたが、当時の「艶」が消えているように思えます。京都、奈良。文化の薫り高い街、しかし、「平安、平城京のフレーム」からの脱却がなされない時間の止まった街。大阪、食い倒れの街、ビル群が乱立してはいますが、「往年の独特な活気」が失われているような気がします。

30年後に見た関西は、色々な意味で変貌していますが、気になるのはやはり神戸です。卒業後、世界の色々な街を見る機会がありましたが、その都度、神戸には勝てないな。といった感想を持ちました。しかし、今の神戸は、どうか、難しいところ。神戸の街をそしてその「文化を再生」するのは、神戸大学を中心とした勢力ではないでしょうか。

以上、思いつくまま、勝手なことを書きましたが、今後ともよろしくお願い致します。

最後に、OBの皆様のご健勝と今後の多様なご活躍を祈念して本稿を終わりにしたいと思います。「遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の声聞けば、我が身さえこそゆるがるれ」(梁塵秘抄)。



神戸中央青果株式会社

代表取締役社長 山口 吉則
(兵 A15)

朝夕肌寒さを覚えるようになってまいりましたが、六篠会会員の皆様には益々ご活躍の事と心からお喜び申し上げます。年一回の六篠会会報を拝読させて頂く度に、当時の学生生活を思い、同時に先輩、同期、後輩の事を思い巡らせます。さて、神戸大学農学部が兵庫県立農科大学を前身として数えること58年、六甲台に構えて40年、時の速さをつくづく感じ、歴史が刻まれていく喜びを味わっています。

私も62歳、兵庫農大、農学科果樹園芸部を昭和42年に卒業して、すでに40年になります。篠山で4年間過ごした最後の卒業生になったと思いますが、篠山での4年間私にとってはあらゆる意味での貴重な4年間でした。今のような豊かさはありませんでしたが四季を楽しみながら少しばかりの勉強、クラブ活動(サッカー)又、囲碁、マージャンと友達との交流を楽しみ、空腹に耐える日はあったものの、楽しい学生生活でした。今、振り返って見て、当時、学生である私の豊かさと貧しさの尺度は、空腹か、そうでないかという事で、時代的にもその様な時代であった様に思われます。今でも篠山には四季折々を楽しむ為、家内とドライブに訪れますが、当時とは様変わりはしているものの、少し町を離れると、昔の篠山の香を感じ、ノスタルジックになり、学生時代の4年間が美しくうつり、青春時代がこの4年間に凝縮されたと言ってもよいぐらい、篠山に感謝です。

卒業後、農業に関係のある所として、神戸市中央卸売市場内青果卸売業の神果神戸青果に入社、2年数ヶ月果実、野菜の現場を経験、市場特有の活気あるセリ取引を見て、早く自分もセリ台に立ち青果物の販売をして見たいと思ったものです。昭和44年11月、東灘区深江浜町(4工区)に神戸市中央卸売市場東部市場が新たに開場、同時に青果卸売として、神戸中央青果が新会社として設立され、若さゆえ新会社へ移り現在に至っております。

東部市場は神戸大学海事科学部の南側に位置しており、神戸市民の台所として生鮮食料品(野菜・果物の青果物、鮮魚、塩干の水産物、切花、鉢植の花弁)を取り扱っている総合卸売市場です。本学からは車で20分程の近くです。是非、足を運んでいただき、新鮮な魚、野菜、果物を食していただきたいと思います。東部市場も平成7年の阪神淡路大震災では卸売棟の全壊という大きな被害を受けました。市場関係者の努力により、いち早い市場機能の回復をし「いつも新鮮美味」を合言葉として、食の安全、安心の確保に努めています。若干、中央卸売市場の説明をさせていただくと、開設者は神戸市で神戸市内には東部市場のほか、本場、西部市場と3つの中央卸売市場があります。私が勤めている会社は中央卸売市場で営業するために国(農水大臣)の認可を受け、世界各地、日本全国から野菜、果物を集め販売しております。中央市場の中には、我々の様な卸売会社の外に、仲卸業者がおり、市場でのセリ風景

がテレビでよく放映されますが、売手が卸売人で買手が仲卸人です。仲卸は卸より仕入れ、その後、量販店、生協、小売店等へ販売する

仕組みになっております。中央卸売市場は集荷・評価・分荷さらにすみやかな代金決済処理という機能を有し国民生活に必要な不可欠な生鮮食料品を効率的に大量に供給する所です。しかしながら、平成3年をピークに、その後は消費者ニーズの多様化、市場外流通の増大や市場間競争の激化などで厳しい状況が続いております。特に、この10年間で、川上(生産地)川下(量販店・小売店)の変化は大きく、川上・川下の大型化が進むにつれ、生鮮食料品の市場経由率も年々低下を見ております。いよいよ平成21年には手数料の弾力化を控えており卸売業者も正念場に入っております。新しい時代にその存在価値を見出すべく現在、ソフト面ハード面で、その対応に順次着手しております。市民に開かれた市場、食の安心安全を確保し信頼される市場又、人、物、情報が集まる活気ある市場になる様に行きたい思っております。

この様に変化の大きい時代こそビジネスチャンスが多いのではないのでしょうか。

さて私も仕事柄長年に渡り産地及び生産農家と付き合いまいりました。その経験から社員によく言っている事は、農業はたしかに第一次産業であるが、もっと大切な事は農業は我々の食として生命を守る意味で生命産業として位置づけるべきだと思っております。そういう意味から、流通を通し農業にかかわっている我々ももっとプライドを持つべきであり、又我々卸にとっては日々集荷している農産物は大切な財産でもあります。昨今食料安保がさげばれていきます様に、食糧自給率は年々低下しており平成18年は39%となっています。耕地面積も昭和35年の607万haから、平成17年は469万haと減少、基幹的農業従業者数も昭和47年頃の700万人から平成17年は224万人に減少しているとの事、5年10年先にはさらに減少すると思われまます。今や農産物も財産ですが、一方生産農家も我々にとっては大きな財産である訳です。今後の自給率を考え卸売として産地に何が出来るか、市場経営とともに大切な問題でもあります。衣食足りて礼節を知ると云うことわざがありますが、正に農業は食の安心安全はもとより、環境、文化、教育にも通じる大切な産業です。学生諸君も今後日本農業の発展にその「農力」を大いに発揮していただきたいと思っております。最後になりましたが神戸大学農学部の益々の御発展と六篠会会員皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

六篠会代議員総会報告 同窓生との連携・大学への支援などを審議

代表理事 中村 直彦 (神1回)

平成19年5月26日(土)、午後5時から神戸・元町のKUC事務局のある本館牡丹園において、六篠会の「代議員総会」を開催いたしました。本年は、同窓生全員に呼びかけて行う4年に一度の総会以外の年に、役員と代議員により行う「代議員総会」を開催する年で、六篠会の活動及び予算・決算などについて審議いたしました。その内容は以下のとおり。

- 1) 第1号議案 平成18年度六篠会事業報告並びに収支決算の承認について
- 2) 第2号議案 平成19年度六篠会事業計画(案)並びに収支予算(案)の承認について
- 3) 第3号議案 六篠会理事及び代議員の選任について
- 4) その他
 - ・学友会の活動実績・計画について
 - ・KUCの活動実績・計画について
 - ・第2回目のホームカミングデイについて

はじめに、北浦会長の挨拶のあと、議長を選出を行い、昭和39年卒、12回生で農学科の坂井永利さんに議長をお願いしました。

(平成18年度事業実績)

まず、第1号議案の平成18年度事業実績については、(1)六篠会代議員総会をはじめ理事会の開催、(2)教官・学生の学術活動に対する援助、(3)六甲祭、マラソン、卒業記念パーティなど学生活動に対する援助、(4)会報の発行、(5)同窓会の支部活動に対する援助、(6)学友会など他学部の同窓会との交流などの活動を実施しました。また、収支決算については、165名の入会を予定していた新規会員が190名に増加したこと、運営経費の節減を図ったこと、行事等において特段の大きな支出がなかったことなどにより、収支が改善され、単年度で剰余金を生み出すことができました。

(平成19年度事業計画)

次いで、第2号議案の平成19年度事業計画(案)については、経済が低迷する中において、行事等において大きな変更点のない例年どおりの計画といたしました。そして、収支予算(案)では、18年度から繰り越された繰越金については、一部を予備費に組み入れ、学舎の改修に伴う農学部からの同窓会への支援要請に応えることとし、残りを六篠会基金に造成することにしました。なお、農学部の学舎改修への支援内容については、(1)大学が担うべき使命と同窓会が応援すべき役割を明確にするとともに、(2)同窓会として相応しいものに対して協力していくこと、(3)今後の大学との話し合いを踏まえて内容を詰めていくことを確認し、執行部に一任されました。

(六篠会理事及び代議員の選任)

そして、第3号議案の六篠会理事及び代議員の選任については、(1)できるだけ現在の役員に留任していただくといった基本方針のもとに、(2)組織から選任されている方で、退任される方、または交代される方は、その組織から候補者を選ぶという事務局案が承認されました。その内容は、理事については、畜産学科の代表の杉本金五さんの代わりに三木啓造さんに、兵庫県庁からは、入江和己さんの代わりに塩飽是雄さんに、神戸大学からは、畠中知子さんの代わりに水野雅史さんに、それぞれ交代されることとなりました。また、その他の方は留任していただくことで引き続きお願いすることにいたしました。なお、会長には引き続き北浦会長に、その他の役職及び理事会の内部機関としての顧問についても後記のとおりお願いすることにいたしました。そして、代議員も一部の方に変更があり、兵庫農科大学13回生の池田吉一さんと17回生の塩田悠賀里さんの代わり



懇親会で交流と連携



代議員総会の様子

に兵庫農科大学14回生の置塩康之さんと、同じく17回生の中西三生さんをお願いいたしました。

(その他学友会等の報告)

その他の事項では、全学の学部で構成される学友会、その活動組織であるKUC(神戸大学クラブ)から活動実績とこれからの計画について、また大学と同窓生との交流の場である「ホームカミングデイ」の予定について、報告されました。

学友会からの報告では、大学と同窓生全体とのパイプ役として各学部の同窓会で構成する「学友会」がその役割を果たしており、運営にあたり常に大学と協議を続けています。このたび、これまで懸案となっていた、学友会のホームページの維持管理を神戸学術事業会が無償で実施することに決まりました。また、神戸大学の広報誌として「Kobe University Style」を発行していますが、最新号のVol.7において、農学部の前身である兵庫農科大学が昭和32年(1957年)に、大学における国際交流の先駆けとして実施した「カンボジアの学術調査」の記事が紹介されました。その内容は「昭和28年にフランスから完全独立を果たして国交樹立したばかりの国に、わずか2人の教官で乗り込み、調査・研究を行ったフロンティア精神は、今後の神戸大学に引き継がれるであろう。」と結ばれています。全てが数値で評価されがちである現代社会ですが、人類への貢献を本来の使命とする大学において、これからの大学のあり方について問題提起しているものとして重く受け止める必要があると思われます。

そして、KUCからの報告では、同窓生の連携と親睦を図る活動を続けていますが、7月に加西市にある農学部の農場をはじめ、農学部が酒造メーカーとで共同開発した「神戸の香り」の酒蔵、三木市にオープンした震災記念公園を見学する計画等が紹介され、併せてKUCへの入会を呼びかけた。

また、第2回目のホームカミングデイは、今年も9月の第4土曜日である29日に開催され、大学卒業35年、45年、55年の卒業生が招待されます。今年は人数制限をしなくてもよいように800名余りを収容できる六甲台講堂で実施されます。これに対し、代議員の桜井委員から「全学の昭和37年の卒業生に呼びかけ、ホームカミングデイに併せて同窓会の特別企画を考えている。」と発表されました。

以上、事務局からの説明を行い、原案どおり可決・承認されました。なお、平成18年度の収支決算、平成19年度収支予算、六篠会理事及び代議員の名簿は後記。

代議員総会ののち、懇親の場に移り、兵庫農科大学・園芸農学科・第1回生の西川先生の挨拶のあと、同農芸化学科・第5回生の新家先生乾杯の音頭で和やかに宴が始まりました。各テーブルでは、それぞれに近況が繰り広げられ、同農芸化学科・第1回生の東先生の中締めでお開きとなりました。

支部便り

KOBE六篠会

生物環境制御学科 山本 佳苗 (神A 35回)

KOBE六篠会は、兵庫農科大学、兵庫県立農業短期大学及び神戸大学農学部を卒業し、神戸市に勤務する者を会員として、昭和59年に結成されました。現在会は、会員122名(現職会員76名、OB会員41名、名誉会員5名)を数えています。



会員の採用区分は教職、農業、化学、衛生監視(農芸化学、畜産)から一般行政まで幅広く、また勤務先も小・中学校(教員)、環境局(廃棄物や環境保全に関わる仕事)、保健所や区役所(食品衛生・環境衛生・動物衛生に関わる仕事)、産業振興局(農・水産・畜産業の農政振興に関わる仕事)、建設局(道路、下水道、公園などの土木関係の仕事)、水道局(水質検査などの仕事)のほか、フルーツフラワーパークや六甲山牧場、海釣り公園・・・などなど多岐にわたっており、安全で安心なまち「こうべ」の実現に向けて、それぞれの職場・立場で会員一丸となって取り組んでいます。

私は平成16年に農業職で採用され、フルーツフラワーパークで2年間イチゴや花の培養苗の生産に携わりました。現在は、農業振興センターに勤務しています。農業振興センターでは農作物に関する様々な仕事を行っていますが、私が受け持っている仕事は野菜や果物、花の生産振興に関することです。暑さ寒さをものともせず、安全安心でおいしい農産物を生産したいと必死にがんばっておられる農家の方々と話をしていると、身の引き締まる思いがします。農政の最近のキーワードは地産地消です。神戸市では様々な特徴のある農作物が生産され、直売所などで販売されています。皆様も見掛けられましたらお試しくださいと思います。

県六篠会近況報告

相野 公孝 (神P12回)

県六篠会は昭和56年にスタートし、今年で設立27年目となりました。現在、現役・OB含めて212名となりました。去る11月3日に明石グリーンヒルホテルで定例総会を行いました。神戸大学農学部長・学科長の中村先生、前副学長・教授の眞山滋志先生、北浦義久会長に御出席いただき、中村先生からは学舎改修による新校舎や兵庫県との連携大学院のご紹介、眞山先生からはこれからの大学のあり方、また、北浦会長からは逆境にある我々後輩たちに頑張るようエールを頂きました。総会はスムーズに運び、1年間の活動報告、会計報告に引き続き、次期会長を始め新役員が決定されました。

総会に引き続いて行われた懇親会では、先輩・後輩一緒になって語りあえる和やかな一時を過ごすことが出来ました。時間の流れは速く、アッと言う間に終了時間となりました。

なお、新たな会長、副会長は次のとおりです。



なお、本会の活動は、年1回の総会・懇親会の開催と名簿の発行が中心となっています。総会・懇親会では、農学部長や六篠会会長等のご出席をいただき、大学の近況を伺ったり、思い出話を花を咲かせたり、会員間の情報交換を進めたりと親睦を深める良い機会となっています。また、平成19年11月には記念となる第20回総会・懇親会を開催しました。今後とも、「同窓生意識」をより一層高めていく努力を続けていきたいと考えています。

役職名	氏名	卒業・回生	所属(勤務先)
会長	菅原 通直	48年・神C 4回	環境局 環境保全指導課
副会長	中尾 博行	46年・神P 2回	(財)神戸みのりの公社
〃	牛若 純一	48年・神C 4回	保健福祉局 西衛生監視事務所
〃	橋本 宏之	51年・神Z 7回	保健福祉局 健康部 生活衛生課
幹事	森川 功一	55年・神C11回	市民参画推進局 生活情報センター
〃	八木 正博	56年・神C12回	保健福祉局 環境保健研究所
〃	長澤 秀起	57年・神A13回	産業振興局 中央卸売市場本場
〃	藤井 俊宏	58年・神C14回	保健福祉局 西部衛生監視事務所
〃	鈴木 壽也	59年・神P15回	産業振興局 中央卸売市場東部市場
〃	松宮 道生	60年・神A16回	建設局 公園砂防部 緑地課
〃	景山 敏一	2年・神T21回	建設局 下水道河川部 河川課
〃	長浜 慶治	2年・神T21回	都市計画総局 計画部 工務課
〃	岡野 光世	3年・神A22回	産業振興局 農業振興センター
〃	為国 司之	5年・神C23回	環境局 事業系廃棄物対策室
〃	角村 朝葉	9年・神A28回	神戸市農業委員会
監事	高谷 信之	52年・神A 8回	産業振興局 農政計画課
〃	渋谷 一郎	52年・神C 8回	保健福祉局 環境保健研究所
〃	平井 朗	52年・神C 8回	クリーン神戸リサイクル(株)環境保全部



- 会長：島原 作夫 (神2A)
- 副会長：武 正興 (神3C)
- 松本 幹夫 (神3A)
- 時枝 茂行 (神4A)

平成十九年度六篠会関東支部の活動状況について

六篠会関東支部 支部長 多田 泊二

今年の夏は異常な暑さのため寝苦しい夜が続きました。会員の皆様方恙無く過ごされた事と存じます。六篠会関東支部では、斯様な暑さの中、8月24日東京凌霄クラブにおいて第10回関東支部総会を北浦会長ご出席のもとに、27名の参加者で開催致しました。今回の総会は第10回と記念すべき総会でありました。関東支部の歴史は約13年前に昆虫学のOBの人達を中心として甲農会を開催しておりましたが、10年前、前関東支部長の和泉 孔庸氏（昭和35年農芸化学科卒）が甲農会に呼びかけし関東支部が設立しました。第1回は霞ヶ関ビルの東海大学会館において約80名が参加され盛大に行われた事を想い出されます。現在では参加者数においては昔日の面影はありませんが、非常に和気藹々とした雰囲気の中で会を楽しんでおります。

関東支部の総会の第一目的は会員相互の親睦にあります。慣例として会員或いは大学教授の人達に依頼して講演会を行っております。今回は財団法人・日本適合性認定協会の森 曜子氏（昭和50年畜産学科卒）に「輸入食品の検査のしくみとその方向性」についてレクチャーを受けました。最近マスメディアでは中国産野菜或いは東南アジア産の食肉等残留農薬についてその安全性が云々されております。森氏は輸入時の検査制度即ち農薬、微生物、添加物等の成分規格に関する試験結果を求める検査について、(1)食品衛生法に基づく食品等輸入届出と検査の流れ、(1)輸入食品等の検査手続き、(1)輸入時の検査システムの概要、(1)モニタリング検査、(1)届出・検査・違反状況等々ご自身の経験と知識をもって極めて簡明に説明戴きました。甚

間のマスメディアにより輸入食品の安全・衛生に不安な面持ちがありましたが、氏の講演で輸入時の厳重な検査内容を聴き安堵致しました。一方、検査に携わる方々の水面化のご苦労により私たちの健康が守られていることも痛感致しました。

関東支部では総会以外にも神戸大学学友会の主催による各学部の持ち回りによる木曜会の講演者の選定を行い、六篠会の会員に参加を呼びかけています。今年の農学部担当の木曜会は11月に22日（木曜日）に開催され、農学研究科の岡山高秀教授に「牛肉の熟成過程における風味の変化」についてご講演戴くことになっております。

関東支部は以上のような活動を行っておりますが、本誌を読まれた関東在住の会員の皆様方には是非お時間を調整して頂き関東支部総会にまた農学部担当の木曜会に参加されますことを支部幹事一同願っております。なお、支部役員は以下のメンバーで構成しております。関東支部へのご意見がございましたら是非お聞かせいただき、より会員の皆様方のための支部活動を行ってまいりたいと思っております。

- 副支部長：岸谷 靖雄（兵10） ●幹 事：田中 易（神12）
山本 隆司（兵10） 川口 真二（神18）
山長岡俊明（兵10）
本田 勉（兵12） ●監 事：河波 朗（神14）
上山 維介（神3） 荒井 良昌（神15）
- 兼神戸大学学友会役員：東野 純明（神13）
早瀬 基（神19） 以上

東海支部（活動状況）

六篠会東海支部 長谷川 信弘（兵C16回）

10月14日（日）に第7回東海支部総会を開催致しました。東海3県より参加され、1年ぶりに顔を会わせ、皆様方が元気である事を嬉しく思いました。

六篠会東海支部の総会では、これまで大学や公的研究機関の先生方に、その活動成果を講演して頂きましたが、本年度は、企業の研究成果に関する講演を計画しました。

近年では、食の安全性や健康指向に関する話題が取り上げられています。

最近の報道では、科学的に無理な解釈が付けられたり、ねつ造した様な話があり、気になります。6月20日のミートホープ 納豆のTV放映や中国製食品が悪い話題となっています。この10月に入り、名古屋コーチンの偽装、伊勢赤福餅の賞味期限表示の偽装が新聞を賑わしていますが、一方で、嬉しい話題もあります。

東海支部に所属する会員の多くは食品企業で活躍されています。その中で、愛知県にある企業での、食品に関するテーマを選び、講演をして頂き、支部会員の勉強会としました。一社は「ミツカン本社」で、兵庫農大から神戸大学農学部まで、多くの卒業生が活躍されています。酢酸菌の研究では、ミツカンは抜きんでており、その技術を応用した食品の開発を推進されています。その一環として、飲料用黒酢を開発され、平成19年度日本農芸化学会・技術賞の栄誉を受けられました。又、微生物の培養技術を駆使して、無臭の納豆を開発・販売されています。

もう一社は「カゴメ」で、カゴメはトマトを原料とする「ソース、ケチャップ、ジュース」で知られていますが、健康指向のリコピンリッチなトマトジュースも開発されています。

8月6日には、朝日新聞社主催の「東海の技」で紹介されていました。更に、乳酸菌を利用した「ラブレ」も開

発され、女優・吉永小百合さんのCMでも有名です。

これら二社の商品は、科学的に解明されたものであり、開発に取り組む方針・方法等についての講演を頂き、東海支部会員の勉強会としました。今回の2社以外にも、安全で、健康指向に繋がる商品を販売したり、開発されている企業もあると思われます。

9月29日の「神戸大学第2回ホームカミングデイ」の農学部での懇親会では、農学部が生産した「神戸牛」、「タマネギ」、「ジャガイモ」、「ポテトチップス」が好評のうちに販売されているという話もあります。多くの消費者は、安全な食材を求めている様です。

総会の講演会では時間も制約されており、十分な勉強にはならないかも知れませんが、来年度以降も、企業の研究成果を講演して行きたいと考えています。

懇親会では、「らんらんチップス」を参加者で賞味しました。又、北浦会長からは、神戸大学の現状や基金の話し、食の安全に関する農学部の取り組みが紹介されました。今後も支部活動を推進したく、本部を含めた皆様の応援を宜しくお願い致します。



延喜会「お酒の効用」

延喜会 新家 龍 (兵C5回)

延喜会は、六條会の中で最も古い支部活動を続けてきた発酵関係に従事する卒業生の集まりです。特に、灘の酒造メーカーの先輩・後輩を中心に定期的に集まって、親睦をはかると共に情報交換に努めています。

さて、日本の伝統的なお酒といえば「清酒」ということになりましたが、現在愛飲されているアルコール飲料には、ビール、ワイン、ウィスキー、焼酎等があります。今夏は格別の猛暑でビールの需要がのびたと新聞は報じていますが、最近の道交法の改正で「飲酒運転とその罰則」が大変厳しくなり、「飲むなら乗るな」「乗るなら飲むな」の鉄則が一段と重要になっております。

ところで、日本で初めてビールを飲んだのは、オランダから輸入されたビールを試飲した長崎の幕府役人であったと云われ、その時の印象が記録に残っています。本格的な日本のビール製造は明治5年に横浜で始まっていますが、そのかなり以前に身近な兵庫県三田市において日本のビール製造があったことは案外知らない人が多いかも知れません。その人は幕末の蘭医「川本幸民」で「ビール製造の

鼻祖」と云われています。彼の顕彰碑が三田小学校の校門近くに建てられていますので一見の価値はあると思います。

さて、「酒は百薬の長」であり、同時に、「毒と薬は同じもの」とも云われています。「ある限度内での飲酒は健康に有益であり、長寿に役立つ」ことになるわけです。貝原益軒の「養生訓」にも「少量有益論」が謳われています。

お酒が長寿を招く理由として、飲酒によって血清高比重リポタンパク(善玉コレステロール)の量が上昇し、血小板の凝集を抑制したり、ストレスを軽減して心筋梗塞を予防し、また、アルコールは脳の古い皮質系の解放現象に繋がり、老化を防ぎ長生きに繋がると云うわけです。勿論、これらは平均的な統計的観察であることは云うまでもありません。

一方、清酒醸造は日本の伝統的なバイオテクノロジーで、その「平行複発酵法」は世界的に有名です。その理由は、発酵した醪自体が20数%ものアルコールを含むからです。お酒を楽しく飲んで「健康と長寿」が全うできれば人生でこんな幸せなことはないでしょう。

神戸大学学友会だより

学友会担当理事 王子 善清 (兵C12回)

神戸大学には現在、11学部・12大学院研究科・1研究所のOB・OGからなる10同窓会があります。「神戸大学学友会」はこれらの同窓会の連合体です。各同窓会の会員が相集い、各同窓会相互の交流と親睦を図るとともに、神戸大学の公的行事について協議したり参加したりして、母校の発展に寄与しています。年2回学長、副学長をお招きして定期幹事会を開催するほか、必要に応じてその都度、臨時の協議会を開いています。

神戸大学学友会には、昭和58年に学友会専用クラブとして「神戸大学クラブ(KUC)」を神戸に開設していますが、東京、大阪にも学友会東京支部(東京凌霜クラブ)、学友会大阪支部(大阪凌霜クラブ)を解説し、活発な支部活動を行っています。全学部卒業生だけでなく、教職員、学生の皆さんも気軽に利用できます。近くのお越しの節に立ち寄っていただくと、母校の動きや現況など情報に接することができます。

<学友会編集委員会より>

神戸大学では年2回、受験生や一般社会人向けの広報誌「Kobe University Style」を発行しています。当編集委員会、その中の「神戸大学学友会から」の欄で、同窓会の活動、トピック、先輩の紹介などの記事や写真等の編集業務を担当しています。先輩登場の欄では、推薦いただいた異色の有名人に、大学の広報担当者が向いてインタビューを行いそれを記事にしています。ぜひ、六條会員で適任者を推薦ください(六條会事務局まで)。

会員制クラブのご案内

神戸大学学友会には、昭和58年に学友会専用クラブとして「神戸大学クラブ」を神戸に開設しました。大阪と東京にも『神戸大学学友会大阪クラブ/大阪凌霜クラブ』『神戸大学東京凌霜クラブ』があります。全学部卒業生だけでなく、教職員、学生の皆さんもお気軽にご利用ください。

神戸 神戸大学クラブ (Kobe University Club=KUC)
〒650-0022 神戸市中央区元町通り1-11-20 本館牡丹園内
TEL&FAX 078-334-1323
URL: <http://home.kobe-u.com/kobe/>

大阪 神戸大学学友会大阪クラブ/大阪凌霜クラブ
〒530-0001 大阪市北区梅田1-3-1 大阪駅前第1ビル11階
TEL 06-6345-1150 FAX 06-6345-1889
URL: <http://home.kobe-u.com/osaka/>

東京 神戸大学東京凌霜クラブ
〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-1-1 帝劇ビル地下2階
TEL 03-3211-2916 FAX 03-3211-3147
URL: <http://home.kobe-u.com/tokyo/>

支部報告 学友会

国立大学法人 神戸大学学友会幹事会名簿

(任期：平成19年4月～21年3月)

役職	氏名	卒業年	選出同窓会
常任幹事	安部 榮治	S36	文窓会(文学部)
監査	花木 直彦	S36	
幹事	林原 純生	S48	
常任幹事	加藤源太郎	H9	翔鶴会(国際文化学部)
幹事	舟橋 健雄	H9	
幹事	山崎 康仕	S56	
副会長	難波 昭	S29	紫陽会(発達科学部)
幹事	東野 修明	S32	
常任幹事	高田 嘉英	S34	
幹事	磯野武之助	S42	
会長	新野幸次郎	S24	(社)凌霜会 (経済・経営・法学部)
常任幹事	堀 功郎	S32	
幹事	高崎 正弘	S34	
幹事	柿 聰	S36	
幹事	王 鞍 功	S36	
幹事	伊藤 宏	S38	
常任幹事	高木 怒司	S34	くさの会(理学部)
幹事	松田 吉弘	S39	
幹事	兵頭 政幸	S53	
幹事	石戸 力	S31	神緑会(医学部医学課)
常任幹事	菱田 繁	S38	
幹事	前田 盛	S46	
幹事	市来 久子	S44	就進会(医学部保健学科)
常任幹事	白川 卓	S47	
幹事	伊藤 浩充	S60	
幹事	山本 和弘	S30	(社)神戸大学工学振興会(工学部)
副会長	多淵 敏樹	S31	
常任幹事	池野 誓男	S39	
幹事	松浦 敏朗	S40	
幹事	西川 欣一	S28	六條会(農学部)
幹事	北浦 義久	S33	
常任幹事	王子 善清	S39	
常任幹事	井上篤次郎	S31	海神会(海事科学部)
幹事	山田 嘉道	S38	
幹事	石田 憲治	S47	

■事務局 〒650-0011 神戸市中央区下山手通6丁目2-19
甲陽会館内 学友会事務局
電話 078-371-6322

KUCの活動について

六條会 KUC担当 能宗 康夫 (兵C2回)

KUC(Kobe University Clubの略)は神戸大学学友会(神戸大学同窓会の連合体)の専用クラブとして1983年に神戸に開設されました。

現在は本館牡丹園(神戸市中央区元町通1丁目11-20)に事務局をおき同窓生のふれあいの場や各学部の相互交流と親睦を図る為に各学部の教授やご活躍中の卒業生による講演会その後の懇親会、また落語会や視察見学会(今年度は7月26日に(1)農学部の加西にある農場で神戸大学牛にさわったり、研究中のジャガイモの試食を行った。(2)県立広域防災センターで地震体験、煙避難体験を行った。(3)兵庫県立フラワーセンター、(4)神戸

大学が企画した純米吟醸酒「神戸の香」製造見学)等母校神戸大学の発展に寄与することを目的にKUCは設置し、運営されています。時代の大きなうねりの中、大学も国立大学法人神戸大学となり「多様な価値観を持った大学」として評価され、他の大学との競争に勝ち残っていかねばならない時代になってきています。

そこで同窓生の皆様の力添えをより発揮していただくために、現場の声を聞く1つの手段としてKUCのメンバーになってご利用をお願いします。

現在、六條会の方たちで会費納入者は23名です。



最新情報!

兵庫県立農林水産技術総合センターに神戸大学連携講座が開設

兵庫県立農林水産技術総合センター環境部長 神戸大学客員教授 河野 哲 (神P1回)

県立農林水産技術総合センターは、研究レベルの向上等を目的に2007年1月神戸大学と連携講座開設の協定を締結しました。この4月以降、総合センターから私(河野 哲)が客員教授に、吉田晋也研究主幹と相野公孝主任研究員が客員准教授に選任され、農学研究科の学生に講義・実習を担当することになりました。

農学研究科は、食料共生システム学、資源生命科学、生命機能科学の3つの専攻からなり、私たちは資源生命科学の中の食料生産フィールド科学講座を受け持ちます。この講座を通称連携講座と呼んでいます。

講義は修士課程に有用生物利用学、博士課程に有用生物資源開発論、各2単位分を総合センターで夏期に集中して行います。さらに、後期には修士1年生に総合センターで取り組んでいる実用的な研究課題について神戸大学で特別連携講義を行います。

去る8月28日から30日までの3日間、農林水産技術総合センター農業大学校の施設で前述の教科の集中講義と実習を実施しました。受講生は総合センター研究員で社会人学生でもある2名を加えた計27名で、圃場や実験室でイネ病害虫及びクモ類の診断と発生調査方法、微生物の選抜や利用法を実習して、視聴覚教室で映像を示しながら各種天敵製剤、抗菌性生物資材、酒米、丹波黒大豆等の地域特産物の改良などを講義しました。学生の受講態度も良く、いずれも優秀な講

義レポートを提出しており、少しは役立つ講義・実習ができたのではないかと3名の教官共々感じているところです。

大半の学生は総合センター内の農業大学校の宿舎に泊まりましたが、近くに食堂とかコンビニが無く、夕飯の確保には少し苦勞があったかもしれません。宿泊期間中の事故が心配でしたが、学生達は冒頭の注意事項等をよく守り、問題行動もなく、無事に集中講義を終えることができました。

最後に、御協力を頂いた関係者に感謝を申し上げ、よりよい連携講座になることを祈念して終わりとします。農業は食の安心安全はもとより、環境、文化、教育にも通じる大切な産業です。学生諸君も今後日本農業の発展にその「農力」を大いに発揮していただきたいと思います。最後になりましたが神戸大学農学部の益々の御発展と六條会会員皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



中央：河野哲教授、左：相野公孝准教授、右：吉田晋也准教授

神戸大学の飛躍と農業の持続的発展を目指して

代表理事 中村 直彦 (神1回)

大学のあるべき姿はなにか・農業はどうあるべきかを考える

《大学への支援》

2004年に、国立大学法人になって以来、大学運営はますます厳しさを増している。

世界に飛翔する神戸大学をめざし、研究、教育、国際交流、社会貢献を推進していくために基金を創設する必要があることから「神戸大学基金に対する協力を得たい」と、野上学長からのメッセージが届いている。それは、来春3月までに目標額30億円を集め、ビジョンを達成するための事業に取り組みたいという内容である。

同窓生の皆さんにおかれては、収入が、小遣いがどんどん目減りするほか、何かとものいりのことと思われそうですが、卒業生個人々々の母校を想う心を表現する形で、協力を賜りたいと思っています。よろしくお願いいたします。

また、現在の農学部をの学舎については、建設後40年近く経過して

いる。そのため、教育研究環境を整備すべく、PFI事業を導入して改修工事を進められていたが、A棟からE棟までのすべてが完成して、10月から供用を開始することになり、併せて、11月9日に「学舎改修記念式典・祝賀会」が開催されました。これには文部科学省をはじめ兵庫県、神戸市など関係者及び六條会からも出席し、約150名が集いました。

なお、六條会からは、A棟1階の学生ホールに大型画面の液晶テレビの設置、農学部周辺に桜並木を整備するなど支援いたしました。



《農学部創設60周年からの飛躍へ》

戦後間もない昭和24年に兵庫県立農科大学として誕生して以来58年が経過した。この間、社会は大きく変化し、大学のあるべき姿も変わってきている気がする。同窓生が大学を思う気持ちも一様ではなくなっている。

難しい時代である。経済復興から経済成長、その後バブルの崩壊といった経験を経て、今や国内では少子高齢化、国際社会においてはグローバル化の新しい時代に入っている。

日本の農業も食糧の増産の時代から、飽食の時代へ。そして今や農村社会では高齢化と後継者不足、耕作放棄地の増大、輸入農産物の増大など農業はますます厳しい状況に遭遇し、その進むべ

き方向は手詰まり・模索の状況である。そのような中で、国の施策も大きく転換しつつあるが、このままでは日本農業は崩壊してしまう危機にさらされている。

農学部のあり方も当然変わらなければならないだろう。そして農業・農学を学んだ我われが今考えなければならないことは何かということである。

再来年は、農学部が発足して60年、遷暦を迎える。これを機に60周年を折念すべき行事を大学と共同で実施し、同窓生が一同に会しこれを祝うと同時に、大学と同窓生、同窓生間が結束し、あるいは連携していくものへと発展させたい。そろそろ準備をスタートしていく必要がある。同窓生から企画内容の提案を待っています。

《農業の危機・持続的発展を一考》

今、日本の農業に何が起きているのか。

2007年度産の新米価格が大幅に値下がりしている。豊作と米離れを背景に、さらに諸外国から米の輸出攻勢が拍車をかける。先日、NHKスペシャルで「あなたは日本の米を食べ続けたいですか？消費も農家も激減・産地の危機」が放映された。



このまま進めば、日本の農業は消滅する。食糧は日本で作らなくてよいのか？安全・安心をどう担保していくのか？これから先、人間の生命と生活を支えていくための、安全・安心な食べ物をいかに持続的に生産していくかが、私たちに与えられた究極のテーマである。

ここで、もう一度課題を列挙して、みんなで考えてみたい。

課題(1)

米不足を政府が管理する食糧法であったが、貿易自由化の波の中で、2004年の食糧法改正で米の流通規制は原則として廃止されている。そして、今年の新米価格が価格形成センターで昨年

に比べ10%前後安い。

60kgの販売価格が1万5千円を割り込めば農家は採算割れになるともいわれている。儲かる農業はほど遠い。これから先、誰が米、食糧を作るのか？

課題(2)

ペットフードに始まり魚介類や農産物の残留農薬など有害物質が次々と見つかった中国産品。気がつけば身の回りはモードインチャイナばかりとは米国の話であるが、日本も同じ。

日本の食糧自給率は40%を割った。なら60%以上を輸入に頼っていることになる。農林水産物の輸入額は約8兆円で、米国、中国、EU、豪州が主な相手国である。

課題(3)

若年人口の都市への流出や非農家の増加によって農家戸数の減少と併せて農村部の高齢化は一段と進んでいる。現在、農業従事者数は330万人と30年前に比べ42%に減少。

そのうちサラリーマンなら定年退職を迎えている65歳以上の者が約60%を占め、現在の日本の素晴らしい農業を支えていることになるが、これから先が見えない。

課題(4)

全国の耕作放棄地は、埼玉県とほぼ同面積の39万^{ヘクタール}といわれている。さらに、休耕田や遊休に近い農地を加えるとさらに増える。今後、農家の高齢化と過疎化がますます進展するに伴い、農業生産活動の停滞や農村集落の機能低下が農地の荒廃化をさらに助長させるものと予測される。

第2回神戸大学ホームカミングデイの開催

副会長 内藤 親彦 (兵A13回)

神戸大学と同窓生の連携を深めることを目的に、第1回「神戸大学ホームカミングデイ」が昨年9月30日(土)に開催されました。毎年9月最終週の土曜日に開催することが決まり、今年は9月29日(土)に第2回のホームカミングデイが開催されました。今年度は名誉教授や来賓とともに、昭和27年・37年・47年・57年・平成18年卒の卒業生に案内状が出され、約900名の参加がありました。

大学全体の記念式典は六甲台講堂において、住田NHKアナウンサーの司会により10時30分に始まりました。神戸大学吹奏楽部によるオープニング演奏に続き、野上学長の挨拶がありました。学長は発展する神戸大学の現状を話されるとともに、国際的拠点大学を目指すための「神戸大学ビジョン2015」を説明され、その達成に向けての取り組みや卒業生への支援を要請されました。

それに引き続き、新野学友会会長の挨拶、自然科学研究科修了生のシリン・ネザマフィさんの講演がおこなわれ、最後に六甲男声合唱団・東京六甲男声合唱団・神戸大学グリークラブによる合同演奏会により閉会となりました。記念式典終了後、12時10分から六甲台本館前の特設テントにおいてティー・パーティーが開かれ、出席者でにぎわいました。

午後は各学部での企画があり、農学部ホームカミングデイは自地域連携センターの活動について伊藤教授が報告され、特に篠山市との地域連携が締結され、

学生のフィールド実習などが実施されていることを話されました。

その後キャンパスツアーがおこなわれ、美しく改修なった学舎を見学しました。研究棟はすでに4月から使用が開始されており、事務棟、講義棟、実験棟がこの秋から使用が始まるそうです。



15時から自然科学総合研究棟の大会議室で懇親会が持たれました。旧教官、卒業生、現教職員が集い、農学部ブランド「神戸の香」を酌み交わしながら歓談のひと時を過ごし、来年の再会を約束して17時にお開きとなりました。

昨年は大学からの招待に加え、農学部独自に農大・短大・神大の各第1回卒業生に招待状が送られましたが、今年は農学部学舎の改修中での開催のため規模を広げることが難しく、各第2回卒業生の招待は見送ったとのことです。



研究室紹介

農環境生物学講座

植物病理学教育研究分野

教授 眞山 滋志

教授 土佐 幸雄

准教授 中屋 敷均

植物病理学は、植物の病気の原因を解明し、その防除方法を開発することを目的とする学問です。人間の病気に対しては医学部があり、動物の病気に対しては獣医学部あるいは獣医学科がありますが、植物の病気に対しては、各大学農学部には1研究室「植物病理学研究室」があるのみです。しかし、その担当領域は人間・動物の病気に匹敵するほど広く、1研究室という小所帯ながらも、原理の解明を目指した基礎研究から「植物医」の卵の教育までを担っています。

神戸大学植物病理学研究室の歴史を紐解けば、本研究室は、先代宮本雄一教授、宮本セツ助教授、竹内正助手のもと、永らくウイルス病の研究に携わってきました。宮本教授・宮本助教授の退官後、平成元年に農林水産省から加藤肇博士が教授として、また眞山が助教授として着任し、現在の糸状菌病研究がスタートしました。その後、中屋敷・土佐が着任し、現在に至っています。なお、植物病理学研究室は、植物防疫学科に属していましたが、平成5年の学部改組で他の植物防疫学科構成研究室とともに生物環境制御学科に移行し、さらに平成19年の大学院重点化に伴い、神戸大学大学院農学研究科生命機能科学専攻農環境生物学講座に所属することになりました。

学生は、現在3回生から修士、博士、研究員を含めて約25名ですが、振り返ってみますと、総勢45名、博士課程の学生だけで13名いた年もありました。このような環境は、学生同士のたゆまぬ切磋琢磨の機会を提供するようです。この15年間で、22名の学生が博士号を取得し、巣立ってゆきました。一方、海外からの留学生もブラジル、インドネシア、ベトナム、中国、韓国等から積極的に受け入れてきました。上記博士号取得者のうち、9名は留学生で、彼らは現在、本国や世界の各地で活躍しています。現在の研究テーマを簡単にご紹介しましょう。

(1)エンバクの病害抵抗性機構の解析:エンバクをモデルとして、植物が病原菌の攻撃を受けたときにどのようにして抵抗性を発現するのかを、細胞学的、生理・生化学的に解析しています。ここ10年間の研究の結果、植物病害抵抗性において最も基本的かつ重要な細胞反応として古くから知られていた「過敏反応」が、動物でよく知られている細胞の自殺、「アポトーシス」と多くの共通点を持つプログラム細胞死であることを明らかにしました。

(2)イネ科植物いもち病菌の病原性変異機構の解析:いもち病菌はイネの最重要病害のひとつで、過去幾度となく飢饉を引き起こしてきました。それに対抗すべく明治以来抵抗性育種が行われてきましたが、新たに育成された抵抗性品種が、農家圃場に出したとたん新しいいもち病菌系統の出現によって感受性に転落するという「抵抗性の崩壊」現象が相次いで起こりました。このような素早いいもち病菌の変異・適応がどのようにして起こるのかを、遺伝学的・分子生物学的に解析しています。

(3)イネ科植物いもち病菌の遺伝子制御機構の解析:イネ科いもち病菌は、最も分子生物学的解析の進んだ糸状菌のひとつで、その全ゲノム塩基配列も他の糸状菌に先駆けて解読されました。このメリットを生かすべく、本研究室ではいもち病菌を用いて、RNAサイレンシング(二本鎖RNAを介した遺伝子制御機構)を利用した逆遺伝学の系を確立しました。この系を用いて、いもち病菌の病原性機構を遺伝子レベルで解析しています。

(4)植物生長促進性根圏細菌(PGPR)の作用メカニズムの解析:PGPRとは、植物根圏または植物根内に生息して、植物の生長を促進しかつその植物を病害に強くする細菌のことです。兵庫県立農林水産技術総合センター、多木化学との共同研究により、そのような細菌をトマト根内より見出しました。現在、その生長促進・病害防除活性の機構を遺伝子レベルで調べています。なお、本細菌を用いた育苗資材が多木化学により製品化され、「セル苗元気」の名で市販されています。

植物病理学においては、植物と病原菌の両者を扱わなくてはなりません。植物の系統、病原菌の系統のコレクションが、研究を支える基盤として非常に重要になってきます。

本研究室では、エンバク、コムギ、オオムギ、イネ、アワ、キビ、シコクビエ等の多数の系統を毎年圃場に植え、維持・管理しています。その作業を共に行う中で、学生は作物の栽培法、遺伝資源の管理法を学び、実験材料の重要性を体得します。さらに本研究室では、多数のいもち病菌菌株を保存しています。これは先代教授加藤肇博士が長い年月をかけて収集されたもので、宿主はイネ・アワ・キビ・シコクビエ・コムギ等イネ科栽培植物からミョウガ等にまで、採集地は日本・中国・インド・インドネシア・ネパール等アジアからウガンダ等アフリカ大陸、ブラジル等南米にまで及びます。その質から言えば、文字通り世界一のいもち病菌コレクションと言えるでしょう。

本研究室卒業生の活躍の場は、農林水産省、植物防疫所、各県農業試験場、農業改良普及所、農薬会社、育種会社、食品会社等、「農」と「食」に関わるさまざまな分野・職種に広がっています。卒業生諸氏の益々のご活躍を祈念しております。



地域環境工学講座

施設環境学教育研究分野

教授 田中 勉

施設環境学教育研究分野(前進は農業工学科農業土木学講座にあります)の紹介をさせていただきます。施設環境学教育研究分野は、1994年4月の農学部改組のとき、生産環境情報学科(旧名称は農業工学科)に、地域環境学教育研究分野(旧名称)として出発しました。1998年4月に学科名称が食料生産環境工学科に変更になり講座名称が農業土木学から地域環境工学になったことに伴って、施設環境学教育研究分野に名称変更になりました。2007年4月の大学院改組では農業工学系が農業経済系と合体し食料共生システム学専攻となりましたが、その中で、本教育研究分野は生産環境工学講座の一分野を構成しています。2008年4月の学部改組では同じく農業工学系と農業経済系が一緒になり、食料環境システム学科となる予定ですが、その中の生産環境工学講座の一分野を構成することになっています。

2003年8月より、井上一哉助手(現在は助教)が新しくメンバーに加わり、現在、教員2名、博士後期課程学生1名、博士前期課程学生6名、学部四年生5名の総勢14名からなっています。

本研究分野では、水、土及び水利施設からなる農業施設に関して、調査・計画・設計・施工という構築手法の観点から、また、維持・管理・診断・改修という機能診断や保全手法の観点から研究を行っています。水利施設の設計、土中における水の流れのメカニズム解明、水と土の力学的相互作用、地盤の浸透破壊と防止工法、土中における物質の移動に関するシミュレーションと地域環境及び環境評価、地すべり地におけるため池からの地下水流れの解析、オランダの水環境と水利施設・地下水位制御など、特に、「土の中の水の流れ」に焦点を絞って研究を行っています。キーワードは、水利施設、地下水、浸透流、地盤の浸透特性、浸透破壊、地下水位制御、地下水の環境・汚染・移動、数値解析、逆解析です。

本研究分野においてこれまでに取り組んできた主な研究成果としては、「異方透水性地盤中の浸透流特性 - 異方性の効果と影響 -」、「異方透水性地盤中の水の流れに関する理論的考察」、「一次元地盤・二次元地盤・二次元集中流地盤・軸対称地盤・三次元地盤における浸透破壊に関する実験と解析」、「浸透破壊に対する新しい安定解析手法 Prismatic failure の考え方の提案と解析」、「浸透破壊に関する事例解析と原因の究明」、「一次元地盤における押えフィルターの設計手法」、「二次元締切り矢板内の地盤に設置される押えフィルターの安定設計理論」、「最適フィルターの設計理論」、「オランダの水環境と水利施設」、「オランダの水環境と地下水位制御」、「北神戸

地すべり地市原地域における皿池からの浸透流解析 - 傾斜遮水ゾーンを設置した場合 -」、「北神戸地すべり地帯 - 市原地域 - におけるため池からの浸透流解析」、「北摂地域における地域活性化の方向 - 生産環境・生活環境整備の現状とあり方 - に関する調査報告」、「地下水汚染源の逆推定問題」、「有害化学物質による地下水汚染のリスク評価」、「地下水汚染の探査に関する観測井配置」、「移流分散挙動における不確実性評価」、「トレーサ実験と画像解析を用いたパラメータ推定」、「地盤統計学による不均質性評価」などがあります。

さて、本研究室で長年取り組んできた一連の浸透破壊実験について、現在までに行った実験ケースは、一次元浸透破壊実験:S0001~S0585(継続中)、大型二次元浸透破壊実験:E0001~E0047(終了)、大型軸対称浸透破壊実験:E0101~E0125(終了)、大型二次元集中流浸透破壊実験:E0201~E0220(実験中)となっています。次に計画している大型三次元浸透破壊実験の実施に向けて準備を行っているところです。これまでに行った実験で最長のものは、軸対称浸透破壊実験E0122であり、朝10時52分から始めて次の日の午後3時10分まで(延べ28時間18分)要しました。この実験では、水頭差の変化に伴う流量の変化、等ポテンシャル線分布の変化、地盤形状の変化等を詳細に観察する必要があり、始まりから終わりまで実験とずっと付き合うことが重要です。したがって、実験は体力勝負となります。実際に実験に携わって頂きました卒業生や修了生、現役生はすでに55名を超えています。学生時代に戻ってもう一度実験をしてみたい人、最新の実験を見てみたい人は是非とも実験室にお立ち寄り下さい。

また、卒業生(及び修了生)の方と卒業後(及び修了後)もコンタクトをとり続けることは大変重要であると考えています。現場で問題となっている最新の話題を聞かせてもらったり、実際に現場を見せてもらったりするのを楽しみにしています。同窓生の皆様には、是非とも、時間を見つけて研究室にお立ち寄り下さい下さいますようお願い申し上げます。



実験E0219にて (Saturday, 12 May 2007)

応用動物学講座

動物多様性利用科学教育研究分野

准教授 楠 比呂志

「動物多様性利用科学?」、旧の畜産学科や応用動物学科の卒業生の皆様には、「全く聞き覚えのない教室(教育研究分野)名だ」と首を傾げておられるのではないのでしょうか。正しくこの教育研究分野は、2005年4月に、大澤朗先生を教授として、改組前の応用動物学科に新設された教室で、私は、同年の8月に、加西市鶉野町の附属食資源教育研究センター(旧附属農場)から配置換えで赴任してきました。

私たちの教室は、野生動物などの種の保存や環境適応能力に関する研究を通じて、生態系の保全はもとより新しいバイオテクノロジーの創出を目的とし、食(大澤教授)と保全繁殖(私)の2つの科学領域から構成される複合的な応用科学分野です。

まず食の領域(写真1)では、ヒトを含めた種々の動物群とそれらを取巻く食環境との相互作用、特に前者の後者への多様な適応能力について研究を進めています。動物の食環境への適応は食性に代表される行動的な方策のみならず、その食性行動を可能にする動物の消化機能の構造的あるいは生理的な対応策に見ることが出来ます。このことをふまえ私たちは生態学、解剖学、微生物学さらには免疫学・遺伝学をも含む複合学問分野からのアプローチをもって、農業・医療領域や自然環境保護に有効利用される知見を産出しています。具体的には動物の多様な食環境への適応能力の発現に重要な役割を担う腸内共生細菌群(特にプロバイオティクス細菌)の検索・同定およびその生理メカニズムの解明し、これら微生物の生理特性を遺伝子レベルまで究明することにより、新しいバイオテクノロジーの創出に向けた遺伝資源の集積を行っています。他方、ヒトと食環境との相互作用における微生物の寄生的な介在にも注目し、ヒトの健康に有害な細菌(特に食水系腸管感染症起因細菌)に関する研究を進めています。

次に保全繁殖領域(写真2)ですが、現在、地球規模での環境破壊により、過去に類をみない速度で、多量の野生生物が絶滅の淵に追い遣られていることは、皆様もよくご存じの通りです。そこで私たちは、「これらの種の保存は我々人類の急務である」

との理念に基づき、保全生物学的な観点から、野生動物に関する科学的な理解を深めるための教育と研究を行っています。具体的には、北は北海道の旭川市旭山動物園から南は沖縄の美ら海水族館まで国内各地の動物園や水族館、また環境省の野生動物保護センターなどと協力して、ジャイアントパンダやツシマヤマネコ、キジ類、ウミガメなど哺乳類、鳥類、爬虫類などあわせて200種類以上の希少動物について、繁殖生理、すなわち雌雄の生殖器官の解剖学的特徴、配偶子(精子や卵母細胞)や胚の性状、発情周期や妊娠の内分泌学的特性などの解明と、保全繁殖技術、すなわち配偶子や胚の保存と人工授精法などの開発に関する教育と研究を展開しています。

それぞれの科学領域におけるリアルタイムの活動状況は、ともに各ホームページ

●食領域

<http://www.research.kobe-u.ac.jp/ans-koala/main>

●保全繁殖領域

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~kusunoki/>

上において逐次公開しておりますので、お時間のある時にもご高覧いただき、ご批評やご助言などを賜れば幸いです。

最後に、冒頭で述べましたとおり、私たちの教室はまだ産声をあげたばかりで、保全繁殖領域に至っては、卒業生は今のところ僅か2名(応用動物学科38回生)しか輩出しておりませんが、伝統ある他の教室に一日も早く追いつけるよう、精進してゆく所存ですので、皆様、是非とも応援のほど宜しくお願いいたします。



応用生命化学講座

有機機能分子化学教育研究分野

教授 佐々木 満

卒業生の皆さん、お元気でご活躍のことと思います。当教育研究分野の近況を報告します。現在当教育研究分野には佐々木満(教授)、三宅秀芳(教授)、滝川浩郷(准教授)の3名のスタッフと、大学院博士後期課程1名(2007年度10月入学)、前期課程9名(M2:4名、M1:5名)、学部生7名が在籍しています。1997年の発足以来、これまで約60名が当教育研究分野で学びました。また、2000年よりJICA研修生の受け入れを開始し、これまで8名(フィリピン、タイ、ブラジル、モザンビーク、トンガ、ツバル、ソロモン諸島、ジンバブエ)が当教育研究分野で研修しました。2007年4月より大学院農学研究科の発足に伴い、教育研究分野が「天然有機分子化学」(佐々木、滝川担当)と「有機機能分子化学」(三宅担当)との2つになりましたが、研究室の運営は一緒にやっています。また、農学部E棟の改修工事が終わり、これまで数箇所に分散していた研究室は6階西側に集中移転しました。さらに、現在、連携創造センター内にあるNMRも11月には改修後のD棟に移転予定です。このように、Sci-finderの研究室内導入を含め研究環境は大幅に改善されました。さて、当教育研究分野では、以下の3つの研究を主に行っています。

1) 新しい有機合成反応の開発(三宅担当)

種々の有用な有機化合物を安価かつ効率的に合成するのに役立つ、新しい有機合成反応の開発を目的とした研究や新規に開発した有機合成反応を利用した有用物質の合成研究を行っています。たとえば、穏和な条件下での炭素-酸素結合の切断を伴う反応を行うための溶媒系の開発を行い、それをアセタール型の保護基の新規な脱保護への応用や、炭素-酸素結合の切断を伴う置換反応への応用などに展開させています。最近、シュウ酸等によるC-O結合およびC-S結合の活性化を利用した反応の開発に成功しました。また、臭化銅(II)を利用した酸化的なラジカル反応の有機合成への応用に関する研究では、3-プロモフラボンの新規合成法を見出しました。

2) 生物活性を有する天然物合成研究(滝川担当)

天然物合成を「分子の世界の創造建築」と位置づけ、論理的な合成経路の考案・分子設計とそれらに基づく合成実験を行っています。目的化合物を合成だけではなく天然物化学者・生化学者・生物学者等との共同研究によって、それら関連諸分野の発展にも貢献できるような課題、あるいは実用・応用による社会貢献が期待されるような課題に取り組んでいます。これまで、「植物アレロパシー活性を有する化合物や昆虫生育抑制活性を有する化合物の新規合成法の開発」などに成功しています。滝川先生はこれらの成果を、「有用な生物活性および特異な構造を有する天然有機化合物の合成研究」としてまとめ、2004年度日本農芸化学会奨励賞を受賞しました。

3) 化学構造と生物活性の相関関係に関する研究(佐々木担当)

生物活性天然物をモデルとした新規作物保護剤の創製を目的に、化学構造と生物活性の相関研究を行っています。「脂肪酸代謝産物の合成と生物活性に関する研究」では、ヒドロキシ脂肪酸やアミノ脂肪酸について、植物病害抵抗性誘導活性化合物や植物生育抑制活性化合物の合成スクリーニングとその作用機構の解明を行っています。「根寄生植物の種子発芽刺激物質ストリゴール関連化合物の合成研究」では活性の認められた化合物の最適化とともに、活性発現機構解明のためのプローブの合成を行っています。脂肪酸関連は遺伝子実験センター(今石先生)、根寄生植物関連は植物機能化学教育研究分野(杉本先生)との共同研究です。

研究活動状況はホームページ

<http://www.research.kobe-u.ac.jp/ans-orgchem/>で公開していますので、是非ご覧ください。

卒業生の皆さん、農学部の改修で新装成った当教育研究分野を一度見学してください。



応用植物学講座

花卉蔬菜園芸学教育研究分野

教授 稲垣 昇

昭和41年(1966)に兵庫県立農科大学から国立神戸大学農学部に移管後、当研究室の名称は園芸農学科「花卉蔬菜園芸学」から植物資源学科「花卉野菜科学」(平成5年(1993))に、そして次年度から資源生命科学科応用植物学コース「花卉野菜園芸学」へと変更の予定です。

研究室の運営は、中村直彦先生から寺分元一先生へ、そして前川進先生へと代が変わり、現在は稲垣、金地通生准教授および宇野雄一助教の3名で担当しています。備品や試薬などの購入から管理、様々な事務処理などが急激に電子化され、私などはその波にさらされ右往左往しているので、実際のところ、ほとんど金地、宇野両先生に頼っています。

現在、4回生6名、修士課程1回生4名、2回生5名、そして博士課程1回生1名の計16名の学生が、極めて乏しい研究費をやりくりしながらそれぞれの指導教員の下で、頑張っています。

世の中がどんどんとデジタル化し、情報通信網が世界に張り巡らされ、その中に自在にアクセスし、ほしいものが素早く手に入る時代が実現し、多くの人々がその便利さを享受する一方で、以前よりも不自由・不利益を強いられている人が増えてきています。このような現在・将来を見つめたとき、アナログ的な感性を維持し磨いていかなければ人が人として幸せに暮らして行くことは困難ではないかと考えています。そのために園芸の果たす役割は小さくなく、園芸の分野も生産性や品質の向上・改善といったオーソドックスな場面ばかりではなく、その領域をどんどん広げ、研究対象も多様化し、医学との境界領域においても園芸療法の効用を検証する様々なアイデアの研究・応用が実施されたりしています。

研究室の仕事については、詳しくはホームページをご覧くださいと思いますが、現在の主な研究を幾つか紹介して研究室紹介とさせていただきます。もし興味あるテーマがあって、共同研究等にご関心がありましたらご一報下されれば幸いです。

花卉関係の研究では、(1)色変わりバラの花色発現(アントシアニン生成)に及ぼす紫外線の影響について、アントシアニン生合成に関わる遺伝子のクローニングや発現解析を行っています。アプローチは変わりましたがこの研究は先の教授の前川進先生の時代から継続しているもので、この研究で博士課程の留学生在が学位を授与されています。また、最近、企業との共同研究で(2)壁面緑化技術の開発に関する研究を行っています。これは、多種類の植物を枯れ芝を培地とした小さなコンテナに一株ずつ植えて、そのコンテナを横向きにして何段も積み上げて、壁面を緑で覆い、景観保全や温度緩和効果を見ようという研究で、真夏の照りつける太陽の下、4回生・院生がイノシシの干渉にもめげず頑張っています。

このほか、(3)遺伝子組み換えによる品種改

良を目指したセントポーリアの組織培養の研究を行っています。セントポーリアも当教室で長年に亘って研究に使用してきた材料で、4回生と修士課程の学生が担当しています。野菜関係では、現在扱っている作目は、アスパラガス、タマネギ、レタス、イチゴ、トマトなどで、(1)アスパラガス、イチゴは、薬培養による半数体の作出が目的ですが、アスパラガスはなかなか思うような成果に結びつかず、何とか突破口を見つけないものと四苦八苦しています。イチゴは、博士課程の留学生在が頑張っていて、成果が期待できそうで楽しみにしています。しかし長年こんな成果の乏しい実験をしていられるのも大学の良いところですが、過去にこの実験を引き受けた卒業生には申し訳ない気持ちです。(2)タマネギは、これまた前々教授の寺分先生の手がけた仕事の継続ですが、こちらはもう少し実用化を念頭においたもので、小タマネギを環境制御下で生産する技術を開発しようとするものです。(3)トマトを使った研究は、環境ストレスの中で長年研究対象としてきた紫外線(UV-B)の影響を評価し、育苗時の紫外線の有効利用の技術を見つけようとするものです。(4)レタスを使った研究では、遺伝子組み換えで耐塩性レタスを作成し、不良環境下での栽培を可能にする、水資源の乏しい海浜地域での海水の有効利用を可能にすることを目的としたものです。遺伝子組み換え体に対する評価には賛否がありますが、今後の食糧問題・環境問題を視野に入ると、研究室レベルでは意義のある研究であると思っています。この他、(5)レタスでは植物工場生産における最適光源の検討ということで、近年注目されているLED光源の効果に関する研究なども、企業との共同研究で行っています。

このように現在行っている研究テーマの多くに卒業生の足跡が印されていて、その上に立って、現在のスタッフ一同・学生が工夫を重ねてよりよい成果を目指しています。当研究室のこのような伝統がさらに将来の学生に引き継がれていくことを願って一同頑張りますので、ご支援よろしくお願い申し上げます。



平成18年度庶務報告

平成19年5月26日(土)に六篠会代議員総会が参加者31名、委任状9名で開催されました。その中で、役員変更の申し出があり、会則に基づき審議した結果、副会長 杉本金五氏の後任として塩飽是雄氏が、理事(庶務担当) 畠中知子氏の後任として水野雅史氏が選出されました。また、代議員の池田吉一氏、塩田悠賀里氏より辞任の申し出があり、後任として置塩康之氏と中西三生氏が選出され、いずれも承認されました。現在の任期は、役員・代議員とも平成20年までです。

■役員

会長	北浦 義久	(兵A 6)
副会長	久保 一兵	(兵C 2)
副会長	能宗 康夫	(兵C 2)
副会長	塩飽 是雄	(神A 1)
副会長	内藤 親彦	(兵A 13)
副会長(代表理事)	中村 直彦	(神Z 1)
理事(副代表理事)	武 正興	(神C 3)
理事(庶務)	水野 雅史	(神C 15)
理事(会計/会報)	竹中 慎治	(神C 24)
理事(会報)	相野 公孝	(神P 12)
理事(名簿)	武 正興	(神C 3)
理事(名簿)	菅原 通直	(神C 4)
理事(学友会)	西川 欣一	(兵A 1)

■役員

理事(学友会)	北浦 義久	(兵A 6)
理事(学友会)	王子 善清	(兵C 12)
理事(KUC)	能宗 康夫	(兵C 2)
理事(KUC)	石賀 暢一	(神C 1)
理事(KUC)	中村 直彦	(神Z 1)
理事	大西 成己	(鶴 3)
理事	阪上 昭宏	(鶴 3)
監事	辻 莊一	(兵Z 12)
監事	外山 眞理	(神C 9)
顧問	東 順三	(兵C 1)
顧問	田中 平義	(兵C 1)
顧問	西川 欣一	(兵A 1)
顧問	新家 龍	(兵C 5)

■六篠会代議員

坂本 圭佑	(兵C 2)
藤中 勤	(兵Z 4)
安尾 勲	(鶴2・兵C 5)
財田 福雄	(鶴 5)
津田 安啓	(兵C 8)
小田垣博三	(兵A 9)
酒井 修	(兵A 9)
櫻井誠次郎	(兵Z 10)
坂井 永利	(兵A 12)
谷 俊洋	(兵A 12)
永吉 照人	(兵A 13)
置塩 康之	(兵A 14)
松井 功	(兵T 16)
西尾 司	(兵Z 16)
中西 三生	(兵Z 17)
得丸 哲士	(神Z 2)
松本 幹夫	(神A 3)
矢代 学	(神P 10)
門岡 織江	(神P 17)
鈴木 武志	(神C 23)

■慶弔記録

以下の方々をご逝去なされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(敬称略・五十音順)

石田 薫	(旧教官)
大畑 隆俊	(神C 5回)
川端 清	(兵A 2回)
國方 伸一	(神A 21回)
小林 義武	(兵Z 16回)
堂本 高明	(旧教官・名誉教授)
飛田 健吉	(兵Z 9回)
福井 康夫	(兵C 5回)
星野 昂	(兵A 17回)

■退職および着任教員

退職および着任された先生方をお知らせします。(敬称略)

●定年退職された教員

大野 清春	(生物環境学)
上島 脩志	(資源植物学)
清水 晃	(動物機能調節学)
土田 隆康	(生物機能利用化学)
堀尾 尚志	(バイオシステム工学)

※吉田 修三(事務長)

●退職された教員

星野 敏	(地域環境工学)
岩永 史朗	(生物機能利用化学)

●着任された教員

笹崎 晋史	(応用動物学)
横山 俊史	(応用動物学)

平成18年度の一般事業として入学者記念品贈呈、会費納入促進、会報発行、各支部活動・学友会・KUC援助、農学部援助、六甲祭援助、六甲山マラソン大会援助、退職教員記念品贈呈、手提袋贈呈、卒業祝賀会援助、慶弔関連などを行いました。また、農学部の学術講演会援助として、生物機能化学科・生物環境制御学科主催の学術講演5件に対して、援助を行いました。

平成19年度についても、例年同様、一般および学術振興事業活動を維持していくことが総会で承認されましたので、それに基づき現在活動しているところであります。

